



おじさんの借金を
少女の体で肩代わり **2**

小説モーメント

陽菜が先月の借金を体で肩代わりをして、数日が経っていた。

あの嫌な出来事を陽菜は忘れようとしたが、忘れることが出来ない……。学校の帰りの時だった。そんな陽菜の前にあの男がまた現れる。

車道から、黒塗りの車の窓を開け話しかけてくる。

「よお、元気そうじゃねえか？この時間に帰るのか？」

「あつ……えつとモロクさん……あの、お金はまだ……」

モロクは陽菜に気安く話しかけ、続けざまに喋る。

「お前が数回、俺に体を貸せば、すぐに返済を終わらしてやるって言っているんだ」

「女子校生の体を抱きたい奴なんて、ごまんといっているんだぜ」

どうやら、隙あらば債務者に声をかけるのがモロクのやり方のようなだ。

陽菜は周りを気にしながら。

「やっぱり……体で返済するのは嫌です」

「いやか？しかしな、お前のバイト程度の金で一体、いつ返済できるって思ってるんだ？」

「そっそれは……」

「それにだ、こんなチャンス滅多にないぞ」

陽菜に考える時間を与えないように畳み掛けるように言う。

「お前もさっさと返済を終わらせてよ。勉強に勤しんだ方が良くじゃねえのか？」

「……」

「まあいいさ、じっくり考えろ」

そう言うと、モロクを乗せた車は走り去った。

(どうすればいいの？)

商店街の一角で陽菜は肉屋のアルバイトをしている。学校から帰宅後、すぐに店番に入ったのだ。

「やだなあ雨が降ってきたわ……お客さま来るかしら」

雨が降り出したことに陽菜は何の気になしに呟いた。

奥で作業をしていた店主が陽菜に話しかける。

「陽菜ちゃん、コロッケ余ったら持って行って良いからね」

「いつも、すみません店長……」

そんな時でも、店に入ってくる客がいた。

「いらつしやいませ」

「陽菜ちゃん、今日も可愛いね」

数件、隣のクリーニング屋のおじさんが話しかけてきたのだ。

陽菜がアルバイトを初めて最近知り合った中年のおじさんである。

名前は浅野誠一と言い、近頃はコロッケを頼むと何かと陽菜に気さくに話しかける。